



# ベストピア Bestopia

ベストピアは  
小原靖夫の  
個人誌です

2013年1月号  
第311号

## どこに希望をみいだすか？

これを今年のご目標とし、新年を迎えました。

暮れに元気な妻がギックリ腰になり、運転免許も返上した私の足がなくなり、一時山の家を下りることにしました。今年の寒さは体に応えていましたので、そう言う時期にきているものと考えて便利を楽しもうという事になったわけです。30日久し振りにアップル銀座で研修を受けた後、羽田空港から伊丹に飛び息子たちの出迎えを受けて宝塚で新年を迎えました。孫娘が高校受験とあって、机の側に座ってタイムキーパーをしながら、赤本(過去問題集)を覗いて驚いたのは、そのレベルの高さです。

最近ベストピアの読者が若くなっているようですので、若向きの内容も時にはいれなければならないと考えていたところで、良いタイミングで素敵で元気の出る文章に多く出会いました。二つの含蓄ある名文を紹介します。

### (1)第一の文 茂木健一郎著「感動する脳」より

かつて脳は、精神的な部分にあまり関与しないと考えられていました。計算や分析という分野には大きな働きをするけれど、心の持ちようにはあまり関係がないと。しかし現代の脳科学で明らかになったのは、心イコール脳であるということです心の持ちようというものも、実はすべて脳の中のメカニズムに支えられている。心と脳は分離したものではなく同一であるという説が一般的になったのです。

たとえば「あなたは今、人生をどれくらい意欲的に生きていますか?5段階で評価してください」というアンケートを取るとします。きわめて曖昧な質問で答える人も「うーん、3か4くらいかな」と適当に答えます。ところがこの適当に答えた結果が中枢の脳活動ときわめて精密に対応しているということが分かってきました。つまり自己評価が高い人ほど、脳の活動も活発であるというわけです。従ってある心の持ちように対して必ず脳の活動の裏付けがあるということになる。

たとえば「前向きに生きよう」などというアドバイスがよくなされます。一見すると単なる精神論のようにも思えますが、実は非常に脳科学の理屈に合ったアドバイスとも言えるのです。前向きの気持ちで生きている時には、前向きに生きる時の脳の状態があります。後ろ向きに生きている時には脳もまた後ろ向きの働きをしている。感情というものに大きく関係する情動系と呼ばれる部分があります。大脳皮質の下の大脳辺縁系を中心とする領域にある物質。この物質が前向きに生きる時と後ろ向きに生きる時とでは、その状態がまったく違って来る。

従って前向きに生きるというのは、実は気のせいでも、心の持ちようでもないのです。脳の中には、実際にそれを左右するインフラが組み込まれているわけです。人生に意欲を持って生きている時には、意欲を持っている時の脳の状態が実際にあるのです。

ということは何を意味するのか。意欲がなくなっていると感じたら、意欲を持っている時の脳の状態をつくってしまえばいいわけです。別に具体的な目標などを探さなくてもいい

い。無理して何かを始める必要もない。とにかく意欲ある脳をつくってしまう。そして一度つくってしまえばしめたもの・脳のインフラが勝手に整備されますから、自然にやる気が出てくる。やる気が出てくれば具体的な目標も次々と生まれてくるでしょう。

私はよく「根拠なき自信」が大切だと言っています。自信というものは、普通、何らかの成功体験から生まれます。つまりは、自信を持つには何らかの裏付けが必要だとされている。もちろんそれも大事なことです。私はあえて逆の発想をします。そう、まずは何の成功体験もないのに、最初に自信を持ってしまうのです。「自分は必ずできる」「オレには自信がある」と勝手にしんじてしまう。「どうしてできると言えるのか?」「その自信はどこから来るんだ?」と聞かれても、そんな根拠はどうでもいい。とにかく自分には自信があるんだと考える。そうすると面白いことに、自信を持っている脳の状態ができあがってしまうのです。

茂木健一郎「感動する脳」より

## (2)第二の文 外山滋比古著「知的創造のヒント」

啐啄の機ということばがある。得がたい好機の意味でつかわれる。比喩であって、もとは、親鶏が孵化しようとしている卵を外からつついてやる(啐)

それと卵の中から殻を破ろうとする(啄)のとが、ぴったり呼吸のあうことをいったものようである。もし、卵が孵化しようとしているのに親鶏のつつきが遅ければ、中で雛は窒息してしまう。逆につつくのが早すぎれば、まだ雛になる準備のできていないのが生まれてくるわけで、これまた死んでしまうほかはない。早すぎず遅すぎず。まさにこのとき、というタイミングが啄の機である。

自然の摂理はおどろくべきほど精巧らしいから、ほかにもいろいろな形で啐啄の機に相当するものがあるに違いないが、孵る卵はもっとも劇的なものといってよかろう。

われわれ頭に浮かぶ考えも、その初めはいわば卵のようなものである。そのままでは雛にもならないし、飛ぶこともできない。温めて孵るのを待つ。時間をかけて温める必要がある。だからといって、いつまでも温めていけばよいというわけでもない。あまり長く放っておけばせっかくの卵も腐ってしまう。また反対に、孵化を急ぐようなことがあれば、未熟卵として生まれ、たちまち生命を失ってしまう。ちょうどよい時に、卵を外からつついてやると、雛になる。たんなる思いつきも、まとまった思考の雛として生まれかわる。われわれはほとんど毎日のように、何かしら新しい考えの卵を頭の中で生み落としている。ただそれを自覚しないだけである。これが立派な思考に育つのは、実際にごくまれな偶然のように考えられる。卵はおびただしく生まれているのに、適時に殻を破ってくるきっかけに恵まれないために、孵化することなく、闇から闇へと葬り去られているのであろう。逆に、外から適度な刺激が、訪れてし破るべき卵の殻がありさえすれば孵化が、起るのに、と思われることもすくなくない。ところが、そういう時に限って皮肉にも頭の中にちょうどその段階に達している卵がない、ということが多い。せっかく、ついにむ力が外から加わっているのに、空しく機会を逸してしまうことになる。

頭の中に卵が温められて、まさに孵化しようとしているともなら、ほんのちょっとしたきっかけがあれば、雛がかえる。この千に一番のかね合いが難しい。それで啐啄の機が偶然の符合のように思われるのである。古来、天末の妙想、インスピレーション、靈感などとしてわれてきたのも、それがいかに稀有のことであるかを物語っている。たとえ稀有だとしても、起ることは起っているのである。人間ならだれしも靈感のきっかけの訪れは受るはずで、それをインスピレーションにするか、流れ星のようなものにしてしまうかの違いにすぎない。これには運ということもある。いくら努力してみても、運命の女神がほほえみかけてくれなければ、着想という雛は孵らないであろうと思われる。

もっと日常的な次元で考えてみる。何でもない人間と人間とがたまたま知りあいになる。互いに不思議な感銘を与え合って、それがきっかけになって、めいめいの人生がそれまでとは違ったものになるということがある。出会いである。一期一会だという。ほかの人たちとどれほど親しく交わっていても得られなかったものが、何気ない出会いで与えられる。ここにも啐啄の機が認められる。われわれはそれと気付かずに、そういう偶然を一生さがし求めつづけているのかもしれない。それにめぐり会えたとき、奇蹟が起こるというわけだ。

## ベストピアのリンクについてご案内

ベストピアにリンクを加えていこうと考えています。リンクと言いましても正確ではありませんが、ホームページを持っていない方の名文や価値ある情報を紹介します。

「ぶどう園通信」は滝沢陽一先生が高齢のため13号で止まっています。近々書いて頂く予定です。

「パリ通信」はパリ在住の古賀順子さんから毎月いただいています。古賀さんのホームページはです。リンクしてみてください。パリ近郊の旅をされる方には、いい情報がいただけると思います。

「第九の新解釈」の藤井義正氏はベートーヴェン第九の研究家で毎月地元の自治体の要請で「心の詩」の講話を市民に話されています。日本の古典から聖書、ドイツ神学等あらゆる方面に造詣が深く、啐啄の出会いでした。

「末期ガン闘病マニュアル」は68歳の弟の体験から家族、友人へ又広く同じ悩みの中にある方、その家族に参考になります。壮絶ですが精一杯「今、ここを生きる」姿が希望を喚起しています。近い将来、本になるかも知れません。

今月は特に「パリ通信」の原稿ではありませんが、古賀さんから昨年いただいたメールの中に、日本文化のパリでの活躍振りを紹介しておられるいい記事がありますので、時期が少しずれていますが掲載します。今年も幅広く国際的に活躍されるようです。古賀さんの通訳は単なる言葉の置き換えでなく相手の心情を正確に伝えてくれますので、専門家に特に喜ばれています。私のような旅人にも詳しい説明をしてくれます。筑後の恩人馬場正英さんの紹介で知己になった方です

## 「浮世絵展示会～日本より感謝を込めて」

パリ7区フロントノワ広場に面するユネスコ本部で「浮世絵展示会～日本より感謝を込めて」が開催されました。主催はユネスコと公益社団法人日本ユネスコ協会連盟で、10月8日から12日までの五日間です。昨年3月11日東日本大震災後、世界中から多くの支援が寄せられました。世界中の人が自分の不幸として受け止め、温かい援助を送ってくださったお礼の意を表する展示会です。1947年7月19日、仙台で日本初のユネスコ協会が誕生します。ユネスコへの参加を呼びかける民間運動でした。第二次世界大戦後、世界平和を願う人々の熱い思いは日本中に広がり、1951年日本のユネスコ加盟が承認されます。第二次世界大戦終結から1952年サンフランシスコ講和条約締結まで、日本は連合国軍占領下にありました。その日本で、国連加盟（1956年12月）に先だってユネスコに加盟したことは大きな意味を持っています。日本とユネスコの関係は深く、パリ本部でこの展示会を実施することは、日本人を支えてきた精神や価値観、文化、日本の在り方をあらためて考え直す機会だと思っています。

今回、千代田ユネスコ協会顧問である望月義成氏の浮世絵個人コレクションから貴重な8点が貸し出されました。そのオリジナル浮世絵と並んで、ボストン美術館所蔵スポルディング・コレクションの美しい原画を300倍にまで拡大したデジタル画像3点(2x3m)と10点(1x2m)が展示されています。細部を拡大した浮世絵からは、これまで気がつかなかった江戸の生活が見えてきます。歌川広重「東海道五十三次、日本橋朝乃景」橋のたもとの魚売り「棒振り」のかごの中には、まな板と鯛が見えます。「今日、浮世絵は美術品です。しかし、200年前の江戸の人々にとって、浮世絵は日常品でした。美術ではなく、江戸の日常を描いた大衆文化として見直して欲しい」。パリ日本文化会館での講演会「200年前へタイムスリット～浮世絵をデジタル画像でのぞく」講師牧野健太郎氏の言葉です。四季折々の行事、茶屋風景、芝居小屋から出てくる観客目当ての立食い寿司屋など、当時の生活が生き生きと描かれています。歌舞伎役者や美人画がファッションをリードし、旅の案内、お店や商品広告として多量に刷られ、日本中に流通していた浮世絵。江戸の人たちは、今の私たちより生活を楽しんでいたのではないかとさえ思えてきます。200年後、日本人で良かったと褒めてもらえる文化を私たちは残せるのかなと思います。

展示会場のユネスコ本部には、京都の庭師佐野藤右衛門が設計した日本庭園があります。アメリカ人の母に生まれ、日本とアメリカに引き裂かれた思いで創作活動を続けた芸術家野口勇が、日本から石を運び入れて造った「平和の噴水」に水が流れ、すぐ側の壁面には「長崎の天使の顔」が掛けられています。1945年8月9日長崎原爆投下で全壊してしまった浦上天主堂の正面を飾っていた天使像です。長崎市からユネスコ30周年を記念して寄贈されました。原爆で片目を失ったこの天使のまなざしに心打たれない日本人はいないと思います。「負の遺産」としてユネスコが世界遺産に登録した広島原爆ドーム、そしてパリのユネスコ本部で静かに私たちを見守っている長崎の天使。後世に残す遺産であれば、「負」ではなく、浮世絵のように後世の人が誇りに思ってくれる文化でありたいと願います。

(この天使のお顔はとても美しいと思いました。小さな小さな像ですが、見るものの心に優しさを伝えてくれると感じます。今回の仕事で一番嬉しい出会いでした。)

